大学生の地理的世界認識

——愛知大学国際コミュニケーション学部生に対する調査から——

Japanese University Students' Geographical Cognition about Foreign Countries: Analysis of Test Results of Students of Faculty of International Communication, Aichi University

加納　寛

KANO Hiroshi

愛知大学国際コミュニケーション学部

Faculty of International Communication, Aichi University

E-mail: kano@aichi-u.ac.jp

Abstract

This paper shows the tendencies of the geographical cognition of average students at undergraduate level in Japan by analyzing the test results of the students of the Faculty of International Communication, Aichi University. The test results showed their basic geographical knowledge was limited. Even though their cognition about East Asian and Anglo-American countries was very high-level, their cognition about the countries in Western Asia and Africa, Latin America, Europe except UK was low-level. Whether the students had studied geography in senior high school or not was, not clearly linked with their test scores. These results lead us to the conclusion that we should ensure students acquire basic grounding in geography in compulsory education such as elementary school and junior high school to improve Japanese students' geographical cognition.

はじめに

大学生の学力低下については，最近様々なところで指摘されている[1)]。地理的世界認識に関しても，日本地理学会地理教育専門委員会による調査結果が「イラクがわからない大学生が44％もいる！」という衝撃的な文句とともに多くの報道機関によって取り上げら

1）戸瀬・西村（2001）などに詳しい。

れたことは記憶に新しい［日本地理学会地理教育専門委員会（2005），地理編集部（2005），滝沢（2005）］。

しかし，この日本地理学会による調査では，学力差の大きい様々な大学に在籍する学生を，その回答者数内訳と大学・学部別の正答率を明示しないままに対象としているため，公表された正答率が日本の大学生の平均的な姿を示すものか否かについては疑問が残る。その点，母集団は小さくとも，学生集団の学力差が比較的小さく，さらに入学試験合格者の偏差値が50程度とされる「平均的学力」の学生が集うある大学，ある学部において学生の地理的世界認識に関わる調査を実施することは，日本の大学生の地理認識の現状を理解する上で意味がある。

筆者の勤務する愛知大学国際コミュニケーション学部は，1998年に開設された学部であり，言語コミュニケーション学科および比較文化学科の2学科から構成されている。学生定員は両学科とも1学年につき110名である。学生の学力程度としては，予備校等の例年の「入学難易度」の発表によれば偏差値50程度とされることが多く[2]，「極めて平均的な学力」をもつ学生がほとんどであるということができ，上記調査の実施には理想的な環境である。

また，愛知大学国際コミュニケーション学部においては，国際的に活躍する人材を教育・育成する使命を有しているが，「国際コミュニケーション」を教育する際に学生たちがどのような世界認識の傾向を有しているのかを掌握しておくことは，教育上非常に重要なことでもある。

地理的世界認識に関しては，地理教育の分野においてこれまでにも多く研究されてきており[3]，とくにメンタルマップを通じた研究が数多く発表されてきている。大学生を対象とするものとしても，山野によるメンタルマップを用いた調査などがある［山野（1999）］。メンタルマップを用いた調査は，各調査対象者の世界認識を端的に示すものであって，その世界像を質的に知るには適しているが，その一方で量的な傾向を示すには困難が伴う。

本研究は，愛知大学国際コミュニケーション学部の学生たちの世界認識がどのような傾向をもつかについて，量的に調査し明らかにすることを目的とする。そのため，本研究ではメンタルマップによる質的調査の手法を採らず，アンケート用紙に印刷した世界地図上に位置を示した30か国の国名を記述回答させる手法を採用した。

30か国の選定に当たっては，豊橋市立南部中学校社会科教諭高峰嘉隆氏のご協力をい

2）たとえば，朝日新聞社出版本部「大学」編集室（2007）に掲載されたベネッセコーポレーションおよび駿台予備学校のデータによれば，愛知大学国際コミュニケーション学部合格率60％以上の偏差値は，53とされている。

3）たとえば，山口（1990），陸川（1994），深瀬（2006）など。

ただいた[4]。30か国の内容は，表2に示した通りである。当該30か国は，同校において中学1学年段階で身に付けるべき国名知識とされているという。換言すれば，義務教育である中学校の社会科教育を受けていれば定着しているべき国名群であるといえる。

アンケート回収の方法としては，国際コミュニケーション学部の両学科共通基幹科目である「フィールドワーク入門」においてアンケートを配布し，15分程度の回答時間を与えた後，その場で回収する方法をとった。調査は2007年5月に実施した。アンケートを実施した2007年度「フィールドワーク入門」の履修登録者は170名であり，このうち149名が2年生である。当該科目は愛知大学国際コミュニケーション学部の「フィールドワーク」に参加する際の先修科目であるが，他の科目と時間割上で重ならないように配置してあるために[5]，両学科の学生が比較的に広く履修できる科目の一つとなっている[6]。履修登録者のうち，当日の授業に出席しアンケートに回答した学生は132名であった。

以下，国・地域ごとの正答および誤答傾向の特徴について示すとともに，性別，所属学科，高等学校における地理履修の有無といった各特性ごとの傾向の異同を分析することにより，平均的学力を有する大学生の世界認識について明らかにしていきたい。

1．全体の傾向

132名の回答者のうち，日本語を母語とする学生は128名，日本語を母語としない学生は4名であった。日本語を母語としない学生については人数が少数に過ぎて個人が特定できてしまうため，回答者に着目する項目については，日本語を母語とする学生の回答のみを分析対象とした。

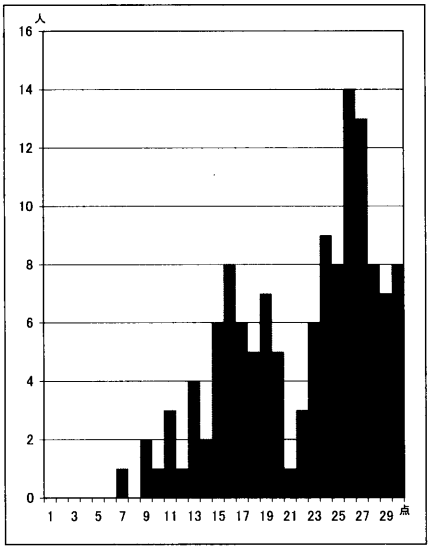
日本語を母語とする学生の得点分布はグラフ1のとおりである。平均得点は，22.1点（得点率73.6％），標準偏差は5.8点（100点満点換算で19.4点）であった。最高点は30点（得点率100％），最低点は7点（得点率23.3％），満点を記録したものは128名中8名（6.3％）であった。中央値は24点（得点率80.0％）である。分布の全体像としては，負に歪曲しているといえる。

得点状況からすると，21点を境として低得点者層と高得点者層に明確に分離している

4）同校社会科教育の具体的な目標等についてご教示いただいた氏にこの場を借りて感謝申し上げる。

5）ただし2007年度は，大規模なカリキュラム改革の余波を受け，同じ時間帯にタイ語および中国語の比較文化学科2学年向け必修科目が入ることになり，これらの2言語を履修する比較文化学科学生は2学年時に本科目を履修することができなくなった。したがって，本アンケートについても，比較文化学科の両言語履修者は回答していない。

6）したがって，履修者が「フィールドワーク」に関心をもっているわけでは必ずしもない。履修者のうち「フィールドワーク」への参加を希望する者は，当初は概ね40％前後であるが，実際の参加者募集時には10％台となる。



グラフ 1　全体の得点分布

表 1　地理学会調査との正答率比較

国名	正答率（%）	地理学会調査（%）
アメリカ	93.2	96.9
インド	95.5	96.8
ブラジル	91.7	92.8
北朝鮮	88.6	90.3
フランス	84.8	87.8
ベトナム	50.8	73.6

ことがわかる。21点以下の得点者は52名（40.6%）であった。低得点者層の最頻値は16点（得点率53.3%），高得点者層の最頻値は26点（得点率86.7%）である。

日本地理学会の大学生に対する世界認識調査の結果と本アンケートの正答率を比較したのが表1である。本アンケートと日本地理学会の実施したアンケートの両者に共通して登場するのは，アメリカ，インド，ブラジル，北朝鮮，フランス，ベトナムの6か国である。ただし，両アンケートには難易度の差があり[7]，正答率について単純な比較はできない。その難易度差のためか，全体において地理学会調査に比べて本アンケートの方が正答率が若干低目であるものの，両者はほぼ同程度の正答率であるといえる。ただし，本アンケートのベトナムの正答率のみは地理学会調査を大きく下回っている。

2．国・地域ごとの特徴

それでは，大学生の認識は，国・地域ごとにどのような異同があるだろうか。国別の正答率および誤答内容は，表2に示した通りである[8]。グラフ2には，各国別正答率と誤答内容を正答率順に示した。また，図1は，各国の正誤傾向についてクラスター分析を実施

7）日本地理学会のアンケートでは，用紙に列挙された国名に対応する白地図中の番号を解答欄に記入すればよいのに対して，本アンケートは地図中の番号に対応する国名を自分で記述しなければならない。この点においては本アンケートの難易度の方が高いといえる。逆に，日本地理学会のアンケートではアフリカ大陸が中央になっており太平洋が地図の両端に分割されているため，本アンケートで用いた日本および太平洋が中央にある地図に対して馴染みが薄いと考えられ，この点では日本地理学会のアンケートの方が難易度が高い。

8）地域区分については，高等学校教育で広く用いられている帝国書院編集部 [2006:5] によった。ただし「CIS 諸国」については，本稿では「ヨーロッパ」に含めた。

表2　各国別正答数・正答率，誤答内容

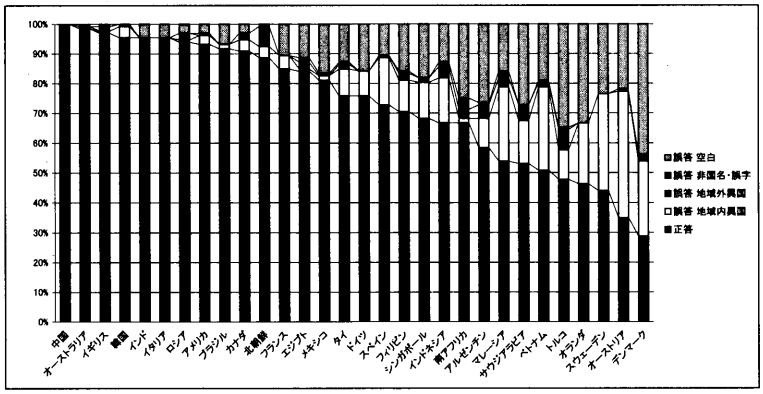
地域	国名	正答数（人）	正答率（%）	誤答数（人）	誤答内容（誤答数の内数）			
					地域内異国	地域外異国	非国名・誤字	空白
東アジア	韓国	126	95.5	6	5	0	1	0
	北朝鮮	117	88.6	15	5	0	9	1
	中国	132	100.0	0	0	0	0	0
東南アジア	インドネシア	88	66.7	44	20	5	2	17
	シンガポール	90	68.2	42	16	2	0	24
	タイ	100	75.8	32	12	2	1	17
	フィリピン	93	70.5	39	14	3	1	21
	ベトナム	67	50.8	65	37	2	1	25
	マレーシア	71	53.8	61	33	4	3	21
南アジア	インド	126	95.5	6	0	0	0	6
西アジア	サウジアラビア	70	53.0	62	19	7	0	36
	トルコ	63	47.7	69	13	9	1	46
アフリカ	エジプト	111	84.1	21	1	3	2	15
	南アフリカ	88	66.7	44	2	4	5	33
ヨーロッパ	イギリス	128	97.0	4	1	0	2	1
	イタリア	126	95.5	6	0	0	0	6
	オーストリア	46	34.8	86	56	1	0	29
	オランダ	61	46.2	71	27	0	0	44
	スウェーデン	58	43.9	74	43	0	0	31
	スペイン	96	72.0	36	21	1	0	14
	デンマーク	38	28.8	94	33	3	0	58
	ドイツ	100	75.8	32	11	0	0	21
	フランス	112	84.8	20	6	0	0	14
	ロシア	124	93.9	8	1	3	0	4
アングロアメリカ	アメリカ	123	93.2	9	4	0	1	4
	カナダ	120	90.9	12	5	0	3	4
ラテンアメリカ	アルゼンチン	77	58.3	55	13	6	1	35
	ブラジル	121	91.7	11	2	0	0	9
	メキシコ	107	81.1	25	2	0	1	22
オセアニア	オーストラリア	130	98.5	2	0	1	0	1

した結果である[9)]。

正答率の平均は73.4%であり，標準偏差は20.6%であった。

図1から，これらの30か国は，大学生の認識において，中国，アメリカ，北朝鮮など

9）クラスター分析には，「EXCEL 多変量解析」（エスミ）を使用した。データとしては132標本の回答を用い，変数クラスターを作成した。原データの距離計算はユークリッド距離を用い，合併後の距離計算にはウォード法を用いた。



グラフ 2　各国別正答率と誤答内容（正答率順）

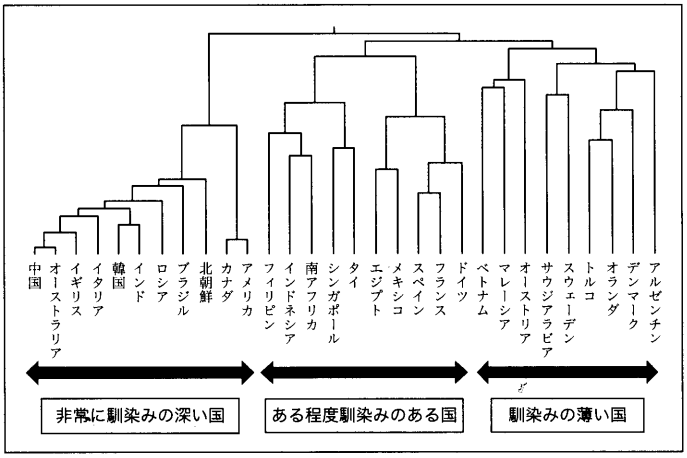


図 1　国別正誤クラスター分析樹形図

の「非常に馴染みの深い国」11か国とそれ以外に大きく二分できることがわかる。それ以外の19か国については，さらにフィリピンやドイツなどの「ある程度馴染みのある国」10か国と，ベトナムやアルゼンチンなどの「馴染みの薄い国」9か国に二分できる。

「非常に馴染みの深い国」の中でも，中国については全員が正答であった。90%以上の正答率が得られた国は，中国以下，オーストラリア（98.5%），イギリス（97.0%），韓国（95.5%），インド（95.5%），イタリア（95.5%），ロシア（93.9%），アメリカ（93.2%），ブラジル（91.7%），カナダ（90.9%）であった。北朝鮮については，「朝鮮」とのみ回答した者が 8 名（6.1%）に及び[10]，また北朝鮮と韓国を逆の位置とした者も 5 名（3.8%）いたために，正答率は88.6%に留まった。

10）採点基準としては，「朝鮮民主主義人民共和国」もしくは「北朝鮮」と回答した者を正解とした。

正答率の高い国は，国土面積の大きな国（ロシア，カナダ，アメリカ，中国，ブラジル，オーストラリア，インド），特徴的な形状の国（イタリア），東アジアの近隣諸国（中国，韓国，北朝鮮），英語圏で学生の留学先として選ばれることが多い国（オーストラリア，イギリス，アメリカ，カナダ）であった。

「ある程度馴染みのある国」には，西欧の中で比較的面積が大きい国（フランス，ドイツ，スペイン）や東南アジアのASEAN原加盟諸国（マレーシアを除く），アフリカの著名な2国，そしてラテンアメリカのメキシコが入っている。

「ある程度馴染みのある国」の中で最も正答率が高かったフランスは，回答が空白である者が14名（10.6%），「ドイツ」と誤答した者が6名（4.5%）であった。ドイツについては空白が21名（15.9%），ヨーロッパの他の国名を回答した者が11名（8.3%）であったが，目立った誤答は「オーストリア」4名（3.0%），「オランダ」3名（2.3%）であった。スペインの場合は，空白14名（10.6%）に対してヨーロッパの他の国名を回答した者が21名（15.9%）であったが，そのうち8名（6.1%）が「フランス」と回答していた。これらの国名がヨーロッパ地域に存在することは理解していてもその位置までは掌握できていない者が，1割程度の比率で存在しているといえる。

エジプトや南アフリカに対する誤答では，アフリカ地域内の国名を誤答する者よりも他の地域の国名を答える者が多かった。その中では，「サウジアラビア」や「イスラエル」など，西アジア地域に属する国名が多く見られた。学生の認識においては，アフリカと西アジアとの区別の曖昧さが見られる。

東南アジアの国々に対する誤答としては，東南アジア地域内の国名を答えた者が多かったが，東南アジア地域外の国名としてはオセアニア地域の国名を回答した誤答が散見された。

「馴染みの薄い国」の中でも，デンマークについては正答率が28.8%にすぎなかった。正答率が50%に達しなかった国は，デンマークの他，オーストリア（34.8%），スウェーデン（43.9%），オランダ（46.2%），トルコ（47.7%）であった。

正答率の最下位から4位までがヨーロッパの国であり，大学生の認識におけるヨーロッパ諸国の二極分化がうかがわれた。正答率が90%を超えた上記のイギリス，イタリア，ロシアの他，フランス（84.8%），ドイツ（75.8%），スペイン（72.0%）に対しては認識が高い一方で，デンマーク，オーストリア，スウェーデン，オランダに対する認識はかなり低い。一般に，西欧の面積の大きい国に対しては関心が高いが，西欧の面積の小さな国や北欧，東欧諸国については関心が低いといえる。なお，デンマークに対しては「ベルギー」とする誤答が10名（7.6%），オーストリアに対しては「スイス」とする誤答が27名（20.5%），スウェーデンに対しては「ノルウェー」とする誤答が22名（16.7%）と目立った。

東南アジア地域のマレーシアとベトナムについては，空白にする者が「馴染みの薄い

国」の中では比較的少なく（いずれも20名台），東南アジア地域内の他国名を誤答した者が多かった。

アルゼンチンについては，地域外異国名を記入した者が6名（4.5%）あったが，その内訳は「ポルトガル」と回答した者2名[11]，その他はアフリカ諸国の国名（ナイジェリア2名，アルジェリア1名，アンゴラ1名）を誤答していた。アフリカとラテンアメリカについても若干の混同が見られるといえよう。

西アジアについてはサウジアラビアとトルコが共に50%前後の正答率にとどまり，学生たちの関心の低さをうかがわせた。

以上の内容を地域別にまとめてみる。東アジアとアングロアメリカについては学生の認識は高いといえる。ヨーロッパについては，特に面積の小さな国についてヨーロッパに存在することはわかってもその位置については認識が曖昧になっている部分がある。東南アジアについては，マレーシアを除くASEAN原加盟国に対してはある程度の認識があるが，オセアニア地域との混同も一部に見られる。また，アフリカについては西アジアやラテンアメリカとの混同が一部に観察されることがわかった。

3．回答者特性別にみた世界認識の特徴

次に，性別，所属学科，高校での地理履修の有無などといった回答者の特性による世界認識の特徴について見ていきたい。

まず，性別による差異を見てみよう。日本語を母語とする回答者128名中，女性は88名（68.8%），男性は40名（31.3%）であった。性別による得点分布の差異については，表3のとおりである。

女性の平均得点は21.1点（70.3%），男性の平均得点は24.2点（80.7%）であり，男性の得点の方が高い。標準偏差は男性の方が小さく，得点の散らばりが小さいといえる。

男女別得点分布を表したグラフ3を見ると，男性の得点が概ね右肩上がりであるのに対して，女性の得点は21点付近が落ち込んだ2コブ型になっていることがわかる。21点以下の得点者の割合は，女性が46.6%，男性が27.5%であった。この性別による得点差についてt検定を実施すると，両側1%の有意水準で有意な差があることがわかった[12]。愛知大学国際コミュニケーション学部生の場合，男性の方が女性に比べて，より正確な世界

11）ただし，アルゼンチンの旧宗主国は，ポルトガルではなくスペインである。

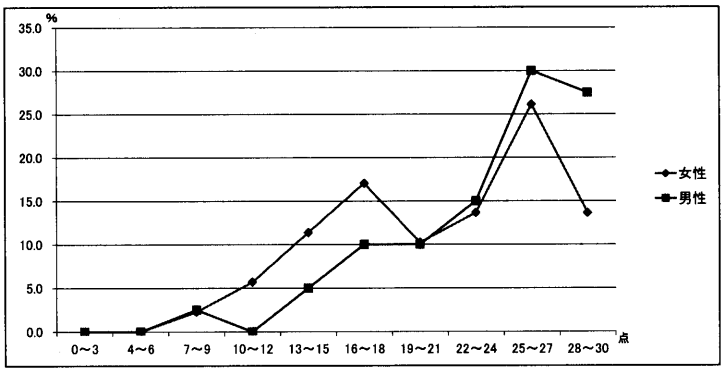
12）$t_0 = \dfrac{24.2-21.1}{\sqrt{\dfrac{(40-1)(5.25)^2+(88-1)(5.81)^2}{40+88-2}\left(\dfrac{1}{40}+\dfrac{1}{88}\right)}} = 2.80$　　$t_{0.01/2,126} = \pm 2.61$

よって，$|t_0| > |t_{0.01/2,126}|$ となり，有意な差があるといえる。

表3　男女別得点分布

	女性	男性
標本数（人）	88	40
平　均（点）	21.1	24.2
標準偏差	5.8	5.3

点数範囲	女性（人）	男性（人）
0～3	0	0
4～6	0	0
7～9	2	1
10～12	5	0
13～15	10	2
16～18	15	4
19～21	9	4
22～24	12	6
25～27	23	12
28～30	12	11
計	88	40



グラフ3　男女別得点分布

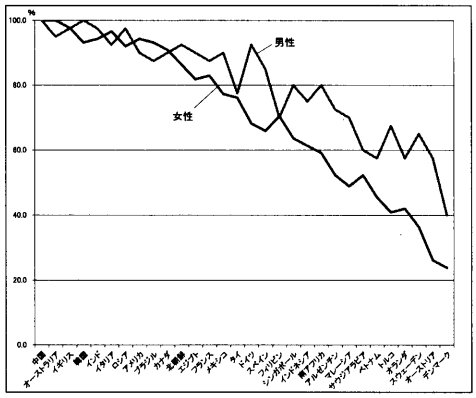
認識をもっているといえる。

性別による正答率を国別に示したのが，表4およびグラフ4である。全体の正答率が低くなるほど性別による正答率の差は大きくなっていく傾向がある。すなわち，「馴染みの薄い国」になるほど，女性の認知度は低くなり，この差が性別による得点差を生じさせているといえる。なお，女性の方が男性よりも認知度が高い国としては，オーストラリア，イギリス，イタリア，アメリカ，ブラジル，カナダ，フィリピンがあり，ブラジルとフィリピンを除くと人気のある英語圏の留学先（オーストラリア，イギリス，アメリカ，カナダ）と人気のある旅行先（イタリア）となっている。逆に「ある程度馴染みのある国」でも，ドイツやスペイン，シンガポールでは性別差が大きく開いた。英語圏ではない西欧の国や，英語圏であってもアジアの国に対しては，女性学生の関心は男性学生の関心に比べて低いといえよう。

次に学科別の差異を見てみる。日本語を母語とする回答者中，言語コミュニケーション学科生は78名（60.9％），比較文化学科生は49名（38.3％），学科不明が1名（0.8％）で

表4 性別による正答率の差

	全体（%）	女性（%）	男性（%）	男女差（%）
中国	100.0	100.0	100.0	0.0
オーストラリア	98.4	100.0	95.0	(5.0)
イギリス	97.7	97.7	97.5	(0.2)
韓国	95.3	93.2	100.0	6.8
インド	95.3	94.3	97.5	3.2
イタリア	95.3	96.6	92.5	(4.1)
ロシア	93.8	92.0	97.5	5.5
アメリカ	93.0	94.3	90.0	(4.3)
ブラジル	91.4	93.2	87.5	(5.7)
カナダ	90.6	90.9	90.0	(0.9)
北朝鮮	88.3	86.4	92.5	6.1
エジプト	84.4	81.8	90.0	8.2
フランス	84.4	83.0	87.5	4.5
メキシコ	81.3	77.3	90.0	12.7
タイ	76.6	76.1	77.5	1.4
ドイツ	75.8	68.2	92.5	24.3
スペイン	71.9	65.9	85.0	19.1
フィリピン	70.3	70.5	70.0	(0.5)
シンガポール	68.8	63.6	80.0	16.4
インドネシア	65.6	61.4	75.0	13.6
南アフリカ	65.6	59.1	80.0	20.9
アルゼンチン	58.6	52.3	72.5	20.2
マレーシア	55.5	48.9	70.0	21.1
サウジアラビア	54.7	52.3	60.0	7.7
ベトナム	49.2	45.5	57.5	12.0
トルコ	49.2	40.9	67.5	26.6
オランダ	46.9	42.0	57.5	15.5
スウェーデン	45.3	36.4	65.0	28.6
オーストリア	35.9	26.1	57.5	31.4
デンマーク	28.9	23.9	40.0	16.1



グラフ4 性別による正答率の差

あった。学科別の得点分布の差異は，表5およびグラフ5のとおりである。

言語コミュニケーション学科生の平均得点は22.9点（76.3％），比較文化学科生の平均得点は20.9点（69.7％）であり，言語コミュニケーション学科生の平均得点の方が高い。標準偏差は言語コミュニケーション学科生の方が小さく，得点の散らばりが小さいといえる。

得点分布をグラフに表したグラフ5を見ると，言語コミュニケーション学科生の得点も比較文化学科生の得点も20点台前半が落ち込んだ2コブ型になっているが，低得点層比率は比較文化学科生の方が大きい。21点以下の得点者の割合は，言語コミュニケーション学科生が34.6％，男性が49.0％であった。しかし，この学科別の得点差についてt検定を実施すると，両側5％の有意水準では有意な差があるとはいえなかった[13]。

ただし，学科別得点分布に性別の要素を加えてみると，表6およびグラフ6のとおりになり，学科による差よりも性別による差の方が大きいことがわかる。

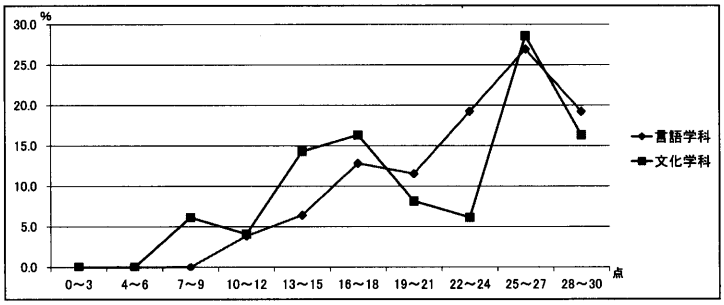
13) $t_0 = \dfrac{22.9-20.9}{\sqrt{\dfrac{(78-1)(5.1)^2+(49-1)(6.6)^2}{78+49-2}\left(\dfrac{1}{78}+\dfrac{1}{49}\right)}} = 1.95$　　$t_{0.05/2,125} = \pm 1.98$

よって，$|t_0| < |t_{0.05/2,125}|$ となり，有意な差があるとはいえない。

表5　学科別得点分布

	言語学科	文化学科
標本数（人）	78	49
平　均（点）	22.9	20.9
標準偏差	5.1	6.6

点数範囲	言語学科（人）	文化学科（人）
0～3	0	0
4～6	0	0
7～9	0	3
10～12	3	2
13～15	5	7
16～18	10	8
19～21	9	4
22～24	15	3
25～27	21	14
28～30	15	8
計	78	49



グラフ5　学科別得点分布

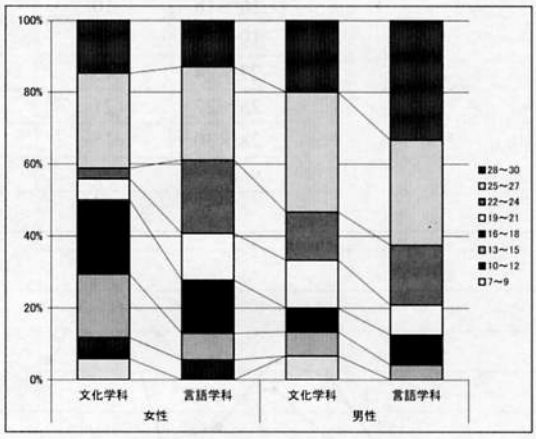
次に，高等学校における地理履修の有無による世界認識得点の差異を見ていきたい。地理履修者の数は，日本語を母語とする学生の中で22名（17.2%）と低かった。なお，高等学校における地理・歴史および公民科目の履修状況を見てみると（複数解答可），必修化とその対応について論議を呼んだ世界史履修者が最も多く110名（85.9%）であり[14]，次いで日本史履修者が97名（75.8%），現代社会は95名（74.2%），政治経済40名（31.3%），倫理15名（11.7%）であった。地理履修の有無による世界認識得点の差異は表7およびグラフ7のとおりである。

地理履修者の平均得点は24.0点（80.0%），地理不履修者の平均得点は21.7点（72.3%）であり，地理履修者の得点の方が高い。標準偏差は地理履修者の方が小さく，得点の散らばりが小さいといえる。

14）必修世界史の未修が各所で発覚し大騒動に発展したのは2006年度であり，このアンケートに回答した学生たちは高校を2005年度以前に卒業しているために世界史未修騒動の影響を受けていない。そのため，世界史を履修していない学生も存在した。

表6　学科別および性別による得点分布

	女性		男性	
	文化学科	言語学科	文化学科	言語学科
標本数（人）	34	54	15	24
平　均（点）	19.9	21.9	23.2	25.1
標準偏差	6.6	5.1	6.0	4.4



グラフ6　性別・学科別得点分布

グラフ7を見ると，地理履修者の得点が概ね右肩上がりであるのに対して，地理不履修者の得点は21点付近が落ち込んだ2コブ型になっていることがわかる。21点以下の得点者の割合は，地理履修者が31.8%，地理不履修者が42.5%であった。しかし，地理履修の有無による得点差についてt検定を実施すると，両側5%の有意水準では有意な差があるとはいえなかった[15)]。

地理履修の有無による国別正答率の差を示した表8およびグラフ8を見ると，全体的傾向としては，日本地理学会の調査において明らかにされたように，認知度が低くなるほど地理履修の有無の差が大きくなることがわかる。とくにオーストリア，スウェーデン，オランダ，サウジアラビアについて，その傾向が顕著である。一方，デンマークやトルコ，マレーシアについては，正答率の差は小さく，地理履修の有無によらず馴染みが薄いことがわかる。とくに地理学会の調査において地理履修者と不履修者の間で大きな差（11.7%）

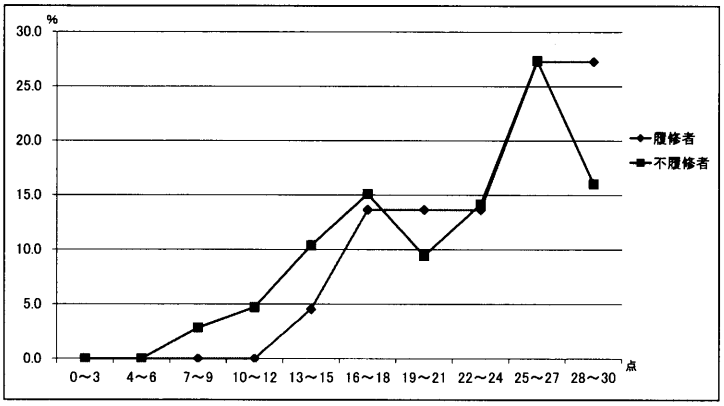
15) $t_0 = \dfrac{24.0-21.7}{\sqrt{\dfrac{(22-1)(5.0)^2+(106-1)(5.9)^2}{22+106-2}\left(\dfrac{1}{22}+\dfrac{1}{106}\right)}} = 1.68$　　$t_{0.05/2,126} = \pm 1.98$

よって，$|t_0| < |t_{0.05/2,126}|$ となり，有意な差があるとはいえない。

表７　地理履修の有無別得点分布

	履修者	不履修者
標本数（人）	22	106
平　均（点）	24.0	21.7
標準偏差	5.0	5.9

点数範囲	履修者（人）	不履修者（人）
0～3	0	0
4～6	0	0
7～9	0	3
10～12	0	5
13～15	1	11
16～18	3	16
19～21	3	10
22～24	3	15
25～27	6	29
28～30	6	17
計	22	106



グラフ７　地理履修の有無別得点分布

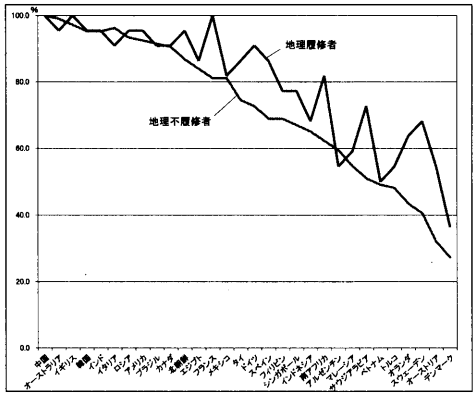
が生じたベトナムの正答率については，本アンケート結果では地理履修者も不履修者も共に正答率が低迷しており，ほとんど差が生じなかった（表９参照）。逆に，地理学会調査では地理履修の有無によって差がつかなかった北朝鮮の正答率は，本アンケート結果では大きな差が開いた。また，「ある程度馴染みのある国」の中でフランスやドイツ，スペイン，南アフリカの正答率については，地理履修の有無によって大きな差が生じた。「平均的学力」の学生たちにとっては，フランスやドイツ，スペインといった国々は，授業で習ったり記憶を促されたりしなければ，もはや関心の対象ではなくなっているのかもしれない。

一方，地理履修の有無に性別を重ね合わせて集計すると，表10およびグラフ９のとおりになる。ここでも，地理履修の有無よりは性別差の方が大きく現われていることがわかる。女性では，地理履修の有無にかかわらず平均点は21点台となっている。

以上，性別，学科別，高等学校における地理履修の有無の別により，得点差を分析してみた。その結果，性別による差異が非常に大きく，学科別や高等学校における地理履修の

表8 地理履修の有無による国別正答率差

	全体（%）	履修者（%）	不履修者（%）	差
中国	100.0	100.0	100.0	0.0
オーストラリア	98.4	95.5	99.1	(3.6)
イギリス	97.7	100.0	97.2	2.8
韓国	95.3	95.5	95.3	0.2
インド	95.3	95.5	95.3	0.2
イタリア	95.3	90.9	96.2	(5.3)
ロシア	93.8	95.5	93.4	2.1
アメリカ	93.0	95.5	92.5	3.0
ブラジル	91.4	90.9	91.5	(0.6)
カナダ	90.6	90.9	90.6	0.3
北朝鮮	88.3	95.5	86.8	8.7
エジプト	84.4	86.4	84.0	2.4
フランス	84.4	100.0	81.1	18.9
メキシコ	81.3	81.8	81.1	0.7
タイ	76.6	86.4	74.5	11.8
ドイツ	75.8	90.9	72.6	18.3
スペイン	71.9	86.4	68.9	17.5
フィリピン	70.3	77.3	68.9	8.4
シンガポール	68.8	77.3	67.0	10.3
インドネシア	65.6	68.2	65.1	3.1
南アフリカ	65.6	81.8	62.3	19.6
アルゼンチン	58.6	54.5	59.4	(4.9)
マレーシア	55.5	59.1	54.7	4.4
サウジアラビア	54.7	72.7	50.9	21.8
ベトナム	49.2	50.0	49.1	0.9
トルコ	49.2	54.5	48.1	6.4
オランダ	46.9	63.6	43.4	20.2
スウェーデン	45.3	68.2	40.6	27.6
オーストリア	35.9	54.5	32.1	22.5
デンマーク	28.9	36.4	27.4	9.0



グラフ8 地理履修の有無による国別正答率差

有無の別については，得点差に大きな影響を及ぼしていないことがわかった。

結 び

以上，愛知大学国際コミュニケーション学部生に対する世界地理認識アンケートの結果を分析することにより，現在の平均的学力を有する大学生の世界地理認識の傾向を観察してきた。

その結果，中学校段階で記憶しておいて然るべき30か国中，平均的には22か国程度の位置と国名が掌握されていることがわかった。

地域的な認識差を見てみると，学生の認識がきわめて高かったのは東アジアおよびアングロアメリカであった。ヨーロッパについては，特に面積の小さな国について認識の低さが観察された。日本の大学において第2外国語として履修されることの多い言語を国語とするフランスやドイツに対する認識も，さほど高いわけではなかった。東南アジアについては，マレーシアを除くASEAN原加盟国に対してはある程度の認識があるが，オセアニア地域との混同も散見された。また，アフリカについては西アジアやラテンアメリカとの混同が観察された。

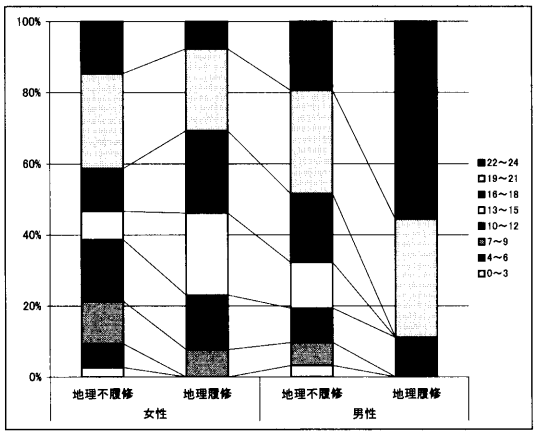
回答者の特性別分析によれば，性別による得点差が最も明瞭に現れており，男性学生の方が女性学生より世界認識度が高いことがわかった。その一方で，日本地理学会において

表9　地理学会調査との正答率比較

国名	地理履修者		地理不履修者	
	正答率（%）	地理学会調査（%）	正答率（%）	地理学会調査（%）
アメリカ	95.5	97.2	92.5	96.6
インド	95.5	97.6	95.3	96.0
ブラジル	90.9	95.2	91.5	90.5
北朝鮮	95.5	90.6	84.0	90.0
フランス	100.0	90.6	81.1	85.1
ベトナム	50.0	79.5	49.1	67.8

表10　地理履修の有無と性別による得点分布

	女性		男性	
	不履修者	履修者	不履修者	履修者
標本数（人）	75	13	31	9
平　均（点）	21.0	21.7	23.3	27.2
標準偏差	6.0	4.3	5.2	4.0



グラフ9　地理履修の有無と性別による得点分布比較

指摘されたような高等学校での地理履修の有無による得点差については，有意差は確認できなかった[16)]。

以上を通してみれば，日本の大学生，ひいては日本人全体の基礎的世界認識を向上させ

16）ただし，日本地理学会の調査では，高等学校において地理を履修した標本数と履修していない標本数がほぼ同じであるのに対して（履修者1866名，不履修者1907名），本調査では両者の標本数の間に大きな偏りがあったことについては留意する必要がある。しかし，辰巳（2005）の調査によれば，地理学専攻ではない大学生の高校での地理履修率は3～4割程度であり，地理履修者と地理不履修者の標本数がほぼ同じになるというのは標本が地理学専攻学生に大きく偏している場合にのみ成立しよう。

るためには，高等学校における地理の必修化や拡充よりも[17]，むしろ義務教育である小中学校の社会科教育における現行の地理的分野の指導に際して，基礎的かつ基本的な知識や学力の定着を徹底していく方が合理的であると思われる。

17）大学の教壇において日々感じるのは，高等学校教育において世界史が必修化されたとはいえ学生たちの世界史的知識は貧弱なままであるという事実である。アウストラロピテクスが千年前や2千年前に登場したと回答してくるような大学生たち（もちろん学生全員がそのような低知識ではないが，授業において時折実際に見られる珍問答である）を見ていると，高等学校での世界史必修化以前に小中学校での基礎知識の定着が第一に必要であると感じる次第である。今後，大学生の有する歴史分野の基礎知識についても，調査・分析をしていきたい。

参考文献

朝日新聞社出版本部「大学」編集室（2007）『2008年版大学ランキング』（朝日新聞社）
地理編集部（2005）「大学生・高校生の世界認識調査」『地理』50–5
深瀬浩三（2006）「生徒・学生の世界全図描図からみた世界認識」『学芸地理』61
日本地理学会地理教育専門委員会（2005）「大学生・高校生の世界認識の調査報告：日本地理学会からの提言」（http://wwwsoc.nii.ac.jp/ajg/organization/committee2003/chirikyouiku050222.pdf, 2007年6月閲覧）
陸川晃（1994）「イメージ分析による地理的世界認識の研究：認知・情意的側面から中学生の変容傾向を中心に」『上越社会研究』9
滝沢由美子（2005）「地図学習のどこが問題か：日本地理学会の調査結果に見る出題例と結果レポート」『社会科教育』554
辰己勝（2005）「高等学校で地理を履修したか？：大学での受講生のアンケートから」『地理』50–7
帝国書院編集部編（2006）『新詳高等地図』（帝国書院）
戸瀬信之・西村和雄（2001）『大学生の実力を診断する』（岩波書店）
山口幸男（1990）「地理的世界認識の発達と社会科カリキュラム」『社会科教育研究』62
山野明男（1999）「メンタルマップからみた大学生の世界認識」『東海地理』36